

### 荷風の周縁世界編制 : 銀行時代の荷風をめぐって

加太, 宏邦 / KABUTO, Hirokuni

---

(出版者 / Publisher)

法政大学多摩論集編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Hosei University Tama bulletin / 法政大学多摩論集

(巻 / Volume)

27

(開始ページ / Start Page)

35

(終了ページ / End Page)

81

(発行年 / Year)

2011-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007418>

# 荷風の周縁世界編制

—銀行時代の荷風をめぐる—

加 太 宏 邦

## はじめに

永井荷風の作品世界や実生活は、どの文学者でもそうであるように、その人なりのある独自の姿をしている。とくに荷風は、その姿が極めて独特なことで多くの人の興味を惹いている。それは、反権力とか反権威とかである。また一方、“無頼派”とか“耽美派”とも言われ、さらに、反骨とか個人主義的とか傍観者的とか、時に我儘、偏屈、吝嗇、奇人、好色などとも称される。

しかし、“独自の姿”は、もちろん、こういう既製の容易な命名をいくら集めても理解できるものでない。今一度仔細に荷風の言説の表象を切り出し、この“姿”の意味をそこに捉えなおす作業が必要だろう。というのは、少し荷風になじめば分かることだが、それらの評言のひとつひとつ、例えば社会との関係で見た時に、荷風は権力に抗って大声をあげた事実はない。あるいは輿論の先頭に立ったこともないことは明白だからである。また、個人的振る舞いで、いささかも破滅的であったり自虐的であったりしたこともないことも確認できる。また性癖としての奇人とか好色というのは、世間の良識とか規範とかにかかわることで、必ずしも荷風の問題ではないことも自明のことである。

“独自の姿”というものは、このようにある局面を取り出して世間の目にそう映るように括って表してもやはり十全には見えてこないのである。

この“独自の姿”を明らかにする事は、荷風の世界の成立へ遡ることへの要請を含み持っている。この探求には、荷風を追い求めるのではなく、むしろ荷風でないもの、荷風が忌避した何ものかを探ることによって詳らかになるという手法が有効でないかと考える。示差的解析と名づけられる手法である。言うまでもなく荷風が忌避することがらは本人の内部が形成する“世界”が見る幻なのだが、そ

の幻影世界すら、荷風がアプリオリに所有するものではない。外部世界が内部（言語）化されたものでもある。われわれは、「内」が作った「外」、 「外」が作る「内」という相関のサーキットの上で荷風についてその人物と作品世界を解く事に挑まなくてはならない。

本論の目的は、「内」と「外」がこのように同義反復となり得るにもかかわらず、また、対立二項でもないこともふまえつつ、あえて、「内」と「外」という差異化を作業仮設として立てて、そこから解析作業を試みることで、荷風の総体世界に迫る作業への接近を試みることである。

この作業に、永井荷風のアメリカとフランス体験を中心に据える。とくに荷風の銀行員生活とほぼ重なり合っていた滞米・滞欧時代に着目して考究を行う。荷風が、その生涯で、かなり明白にかつ単純な意味での“外”の世界に身を置き、濃密な接触をもった唯一の時期が銀行員時代だからである。

ニューヨークとリヨン時代という“外”体験は、実は、明治の人々にとってはむしろ求めるべき“中心”世界であった。しかし、荷風においてはそこへの反動から、押し出されるようにして周縁世界を編制していったのではないか。この周縁世界との関係性の探求こそ荷風の“独自の姿”の解明に必須の作業だと想定される。

そこで、荷風にとって外部世界である銀行員生活を仮に《中心》と名づけ、併せて、そこから排除される世界を《周縁》と名づけてみる。この単純な二項をまず立てて、荷風における二種の世界区分の発生や、この二項それぞれの枠組みの意味、ならびにその変容の過程を探っていく。この作業を通して、排除された《周縁》の様相が明らかになり、この《周縁》にこそ荷風の独自の姿を説明する要素エレメントが存在するという結論を導きたい。

1

考察に用いる時代は、銀行時代を中心にして、その前後の明治36（1903）年10月ごろから41（1908）年5月ごろの間とする。すなわち荷風の年齢でいうと23歳10ヶ月目あたりから28歳半の時期にあたる。この間に日露戦争（明治37 [1904]年）が含まれることに注目しておきたい。このテーマは後に扱うであろう。

まず、家庭から概観しておく。

父の久一郎（嘉永5年—大正2年 [1852-1913]）は明治の大エリートだった。貢進生として明治4年プリンストン大学、ボストン大学などへ留学後、内務省衛生局長などを歴任し、日本郵船に天下りした。本論の中心となる時期には、日本郵船横浜支店長（重役）の要職にあった。母の恆（文久元年—昭和12年 [1861-1937]）は鷺津毅堂という尾張藩の侍講で、維新後には司法省の権大書記官となる人の長女で、結婚後、恆は母親（継母）の影響でキリスト教に入信した。

一方、荷風の弟の（鷺津）貞二郎（1883-1927）は東京専門学校（現・早稲田大学）をでて、三菱銀行本店に一年勤め、退職後、日本神学社に属し、キリスト教の牧師となる。植村正久の下で富士見町教会副牧師をしたりして日本各地の教会で布教にあたった。もう一人の弟の威三郎（1887-1971）は東京帝国大学を出て、農商務省官僚となる。のちアメリカやドイツに留学し、退官、東京高等農林（現・東京農工大学）教授となる。叔父の永井松右衛門は衆議院議員、その息子（荷風の従弟）の松三<sup>1)</sup>（明治10年—昭和32年 [1877-1957]）は東京帝国大学出の外交官（ドイツ駐割特命全権大使などを経て外務次官となる）だった。また、叔父のひとり（坂本）鉦之助は福井県知事（後、枢密顧問官）、もうひとりの叔父（大島）久満次は神奈川県知事（後、衆議院議員）だった。

この近親者に共通する特色は、そのほとんどが世俗的な意味で明治時代的な立身出世の栄達者であり、政治・経済・官僚世界での権力者であったことである。このことは着目すべき特徴だと思われる。すなわち《中心》に彼らはいた。一方、荷風はこのような経歴に無縁な道をさ迷った。さらに言えることは、これらの人々いずれとも親密でなかった。荷風はあきらかに少年時代から相対的に《周縁》化されていた。父とさえ、抵抗と畏怖とのアンビヴァレントな危うい関係をかろうじて保持した。青年時代以降は、すでに近親者の多くとは絶交、断絶関係にあり、普通の疎遠という以上の厳しい間柄でありつづけた。

- ・ 余は親類のものとは大正三年の秋以來故ありて道にて逢ふことあるも、避けて顔を見られぬやうになし居れるなり<sup>2)</sup>。
- ・ 午後大久保の永井より使の者なりとて二十ばかりの學生訪ひ來れり。思ふに先年義絶せし弟威三郎の子なるべし。對談すべき義理合ならねば余は留

守番にて此家の主人は旅行中なりと言ひて其儘かへしたり<sup>3)</sup>。

これだけ著名な血縁者が周辺に多くいたにもかかわらず、身近からの荷風についての思い出話や伝記エピソード、言及などはほとんど残されていない<sup>4)</sup>。

このことでも分かる通り、荷風の「内側」に取り入れられる血縁者は、銀行(《中心》)を辞めて、宗教者となって比較的若くして死んだ弟の貞二郎や邦楽家の杵屋五叟(大島一雄)ぐらいである。すなわち経済・政治・官界などの《中心》から離反したもののみに親和性を懐き、それ以外には、敬遠する以上の激しい嫌悪、拒絶を示したのである。もっとも、杵屋五叟についてさえ、戦後の苦しい中、住まいのことなどで世話になりながらも、その三味線練習音や原稿紛失に関して悶着を起こしている。

このように、荷風においては、生得的に、あるカテゴリーにあるものを疎外する感情が備わっていると見たほうがいだろう。そのカテゴリーとは、いわゆる《中心》である。これを本論では仮にあいまいに《中心》(荷風にとっての「外」の世界)と名づけて用いる。問題は、上で述べたように、その《中心》を単純に決めつけることでもなく、また描出をすることだけでもなく、《中心》と《周縁》の相関的なありようを定めることである。一体荷風の《中心》と《周縁》とは何なのか。

## 2

晩年の荷風の外出時の写真には、つねにポストンバッグを手にした姿がとらえられている。バッグ、ここに預金通帳と印鑑を入れて持ち歩いたという。昭和12年の『溍東綺譚』の作中で荷風とみなしてよい主人公・大江匡は、散歩の途中で警官に不審尋問を受け、持ち物を検査されたあとで放免されたことを描写している。その時にこういうことを述べている。

- ・ 後で考えると、戸籍抄本と印鑑証明書とがなかつたなら、大方その夜は豚箱へ入れられたに相違ない<sup>5)</sup>。

このエピソードが興味深いのは、《周縁》なる荷風を《中心》と繋ぐ紐帯としての公的証明書（戸籍抄本と印鑑証明書）の存在を示していることである。この「公」に守られた「私」という構図を見ておかないと、荷風の《中心》に対する慎重で周的な拒絶の態度表明の表象は分かりにくいものとなる。

また、放免されるときに巡査に対してこういう態度をとる。

- ・「御苦勞さまでしたな。」わたくしは巻煙草も金口のウエストミンスターにマッチの火をつけ、薫だけでもかいで置けと云はぬばかり、烟を交番の中へ吹き散して足の向くまま言問橋の方へ歩いて行つた<sup>6)</sup>。

見えやすい《中心》権力の象徴である官権に対しての無言の抵抗姿勢を示すのであるが、荷風が《中心》に対するときには、暴力的な抵抗を示さない。これも荷風の《中心》＝《周縁》関係の特質といえる。

晩年の散歩では、撮られている写真から見る限り、ほとんどが背広にネクタイの正装である。片手にはボストンバッグ（カバン）を持ち、その中には、三菱銀行八幡支店や市川支店の預金通帳が入っていた。最終的には、その額は2272万円。そのほか250万円ていどの株券があったと言われる<sup>7)</sup>。戦後まもなくのことであるからこの金額は尋常なものでない。荷風が金銭にルーズでなく経済合理性に徹していたということは、日本銀行の調査局長、理事を歴任した経済評論家の吉野俊彦の『“断腸亭”の経済学』という大部の研究書が詳細に亘って明らかにしている<sup>8)</sup>。吉野は荷風の経済学というテーマが成り立つ理由をいくつか挙げているが、その第一は横浜正金銀行の行員体験だとする<sup>9)</sup>。

すると、荷風が金に細かいとか吝嗇であったとかいう一般的評言<sup>10)</sup>より経済観念のしっかりした人だったとすべきなのか？ そうだとして、本当の問題は、その理由なのである。おそらく、ここでも着目すべきは、通貨＝国家の保証を「私」の存立要件につないでいるということでないか。荷風は、金が惜しいとか金を家計の視点に立って貯めたいという直接的な動機で資産を持っていたのではなく、金銭の表象に係わることであったのだ。つまり、《周縁》なる「私」の国家的“保証”なのだ。

このように見ると、1952（昭27）年の文化勲章受賞<sup>11)</sup>の意味もよく理解できよ

う。授賞理由については、報道などによる公式発表では「高邁な文明批評と透徹した現実観照」<sup>12)</sup> というような説明があるが、これはあきらかに戦前、戦中における軍国政治体制に批判的な姿勢とか、戦争中に文学報国会にも属さず、大政翼賛会的な作品も書かず沈黙をしつづけたという戦後の評価が反映している。しかし荷風は、そのような精神で戦前・戦中を過ごしていたのだろうか。戦後の国家や読み手が勝手に誤解しているだけではないか。もし、その評価どおりなら、戦後の文化勲章も国家体制の発露の一部なので、当然、荷風は「高邁な文明批評」の観点からも「透徹した現実観照」という意味でも、受けなかったはずである。荷風について、説明できる動機は、自己の形式的存在証明である。《中心》である国家からの現実的、実用のお墨付きと報奨金を受け取れることである<sup>13)</sup>。皇居での授賞式の二日後には浅草ロック座の座長とストリップ嬢が開いてくれた祝賀の宴に出ている。これは、むしろ国家や文化勲章をみごとにコケにする態度ともとれるが、荷風にはその意識すら働いていない。荷風にあったのは、国家というものがあるがどうやら面倒な《中心》で、これを相手にあれこれ言うのは浪費だという認識と、しかし、一方でこの国家に迎合するのはもっと無意味だという認識の二つであった。当時の見方はまるで奇人荷風の無節操な授賞、早朝からいそいそと身づくろいをして出かける歯抜け老人の醜態という扱であった<sup>14)</sup>。だが、そのことを含めてすでに荷風は、文化勲章をもらう自分の姿が《周縁》を支える用具の一つで、おそらくそれはすでに身に備わった無意識の計算でもあったといえる。

### 3

荷風の銀行員時代を考察するための略年譜は以下のとおりである。

- 明治12 (1879) 年 東京に生まれる。
- 明治30 (1897) 年 外国語学校清語科に入学。
- 明治36 (1903) 年 7月父の勧めで渡米 (米国に3年9ヶ月滞在)。23歳8ヶ月。
- 明治38 (1905) 年 12月横浜正金銀行ニューヨーク支店に就職 (1年半勤務)。26歳。
- 明治40 (1907) 年 7月リヨン支店に転勤。27歳8ヶ月。

## 荷風の周縁世界編制

- 明治41（1908）年 3月末で退職（8ヶ月勤務）。退職時28歳4ヶ月。2ヶ月間パリに遊び7月帰国。8月『あめりか物語』発刊。
- 明治42（1909）年 3月『ふらんす物語』刊行直前に発禁。
- 明治43（1910）年 慶應義塾大学文学科教授に就任。雑誌『三田文学』を創刊・主宰。
- 大正5（1916）年 慶應義塾退職：女性関係に忙しいこともあり、健康上の理由ということで辞職。
- 昭和27（1952）年 文化勲章受章。
- 昭和34（1959）年 市川市で没。79歳

ここから、横浜正金銀行時代（26歳から28歳と4ヶ月までの間）を抜き出して考察する。荷風の銀行員時代は通算2年2ヶ月（ニューヨーク支店1年6ヶ月、リヨン支店8ヶ月）であった。上記略年譜で分かるとおおり、アメリカ滞在の後半からフランス時代が銀行員生活に重なる。

渡米の経緯はよく知られていることなので、簡単にふれる程度にしたい。ひとことというなら放蕩息子に手を焼いた父が、経済人に仕込むために修行に出したということだ。父親は、荷風がすでに沈潜しようとしていた《周縁》（歌舞伎、落語、歌舞音曲などの遊芸や文芸）から息子を引き離し、世俗的な《中心》へ練成させたいという気持ちであったろう。

すでに荷風にかなり《周縁》への傾斜が感じられていたことは事実である。父が環境変化による心機一転を願ったのは当然のことだった。しかし、荷風はアメリカでも落ち着くことがなかった。居所までが定めのないことになっていったのである<sup>15)</sup>。アメリカは、いわば国全体が健全で前向きで中庸な《中心》志向だったので、さすが荷風も自己を埋没させるべき《周縁》すらが希薄で、そうとう戸惑ったと思われる。

- ・ 故園の秋は蟲の音と月の光とに詩の如く美しかるべきをこの地にはかかる自然の詩歌絶えてなければ唯來るべき冬を待つべく日ごと夜ごと寂寥と憂鬱の情を増し行くのみ<sup>16)</sup>。

この一条は、端的に、荷風の戸惑いを表現している。日本と異なり、アメリカでは、季節も単に気象の区切りでしかない。意味をほとんど帯びない薄手な表象。さらには、自然だけでなく、文化一般についても同様だ。

- ・ 何につけても、吾々には米國の社會の餘りに常識的なのが気に入らない。ロシアのやうな（略）虐殺もなければ、ドイツ、フランスに於いて見るやうな劇的な社會主義の運動もない。（略）激烈な藝術の爭論もない。何も彼も例の不文法（Unwritten law）と社會の輿論（Public opinion）とで巧に治つて行く米國は吾々には堪へがたい程健全過ぎる<sup>17)</sup>。

荷風は、ここで見る限り、滯米当初は、アメリカ文化のフラットな状態に極めて居心地の悪い思いをしている。忌避すべき露骨な《中心》もなければ、逃げ込む先の《周縁》もない宙吊り状態であったのである。

- ・ 已むを得ない。吾々は米國の地にある間は、米國が生んだ唯一の狂詩人エツガー、アラン、ポーの為に一杯を捧げやうと云つて、酒場のカウンターに寄り掛りウイスキーを飲んだ事も幾度あつたらう<sup>18)</sup>。

《中心》社会での愚鈍なまでの平板さに対して、荷風が見出す「唯一」の逃避先は、「ポー」であり、「酒場」である。このような、いささか単純ではあるが、しかし明確な《中心》と《周縁》と言う二項意識が芽生え始めたのは結局、最後に居を定めたニューヨーク時代あたりからだと思える。そのことを見ていこう。

#### 4

荷風は、ニューヨークへ移る前はワシントンの日本公使館に寄寓して、雑用係をしていた。

- ・ 公使館に赴き（中略）三階の一室を我が寢室に當てらる。公使館二階表の廣間には高平公使住み給ふ由<sup>19)</sup>。

日露戦争（明治37年－明治38年[1904.2-1905.9]）の只中に荷風はアメリカにいた。職のなかった荷風は、いとこの永井松三の周旋で、在ワシントンの日本帝国大使館（このころ「公使館」から名称変更）に小使いとしての職を得た。日露戦争末期、講和会議<sup>20)</sup>のために大使館の人手がポーツマスの会議に取られて、留守役の下働きが必要になったからである。しかし、日本中が沸いていた日露戦争勝利の講和会議の現場にもっとも近い場にいながら、その会議にも、公使の高平小五郎や全権大使の小村寿太郎にも興味を示していない。とくにもっとも身近だった《中心》である高平公使との接点は「高平公使閣下に見えし」という挨拶程度である<sup>21)</sup>。ここでどういう話をしたとか、交渉の行方などには一切興味を懐いた形跡がない<sup>22)</sup>。

- ・ 世事にうとい僕の身には一向趣味がないが今日は小村大臣が紐育へ着くといふので世間は何となく色めいてゐる様だ<sup>23)</sup>。

それどころか、かせいだ金で表向きは「こゝに勞働し其の給金と故國よりの送金とを合算して秋風と共に一躍大西洋を越えて佛蘭西へ行かんとす」<sup>24)</sup> という初日の志も忘れたかのように、イディスという娼婦との関係がはじまる。日露国家間の交渉とほぼパラレルに売笑婦との交渉の深みにはいる荷風。ここに、世界の《中心》に対する私という《周縁》志向の兆しが見えてきたのかもしれない。これは、ワシントン滞在中ではじめて身近に見えた《中心》（日本国家）があまりにも強烈な姿をしていたので、総体的に《周縁》の演出が容易になったとも言える。とはいえ、荷風はまだ《中心》を意識しつつ



荷風が臨時雇いとして起居したワシントンの日本公使館



小村寿太郎とともに全権委員を務めた高平小五郎公使

《周縁》にも墮することのできない心情にゆれている。

- ・ 僕も色々將來の事を考へるが今から商賣人にも役人にもなれない。さうかと云つて文學者で成功するのも先づ望少なして矢張若旦那で四疊半へ引込み世の名聲には相關せず靜に自分の好きな書物でも讀んで一生を送りたいと思つてゐるのさ<sup>25)</sup>。

## 5

ポーツマス条約も締結され、荷風は10月末で解雇される。そこで日本郵船横浜支店長であった父の久一郎は横浜正金銀行頭取であった相馬永胤に息子の就職の斡旋を願う。横浜の財界でもっとも著名人同士であり、二人とも、明治初期の米国留学生同士だった<sup>26)</sup>。この関係で、荷風は、横浜正金銀行ニューヨーク支店（アメリカではニューヨーク州法の規制によって“出張所”と称した）に「事務見習員」として採用になるのである。横浜正金銀行ニューヨーク支店は当時ウォール街63番地（63 Wall Street）にあった<sup>27)</sup>。



当時のウォール街。手前左が旧国会議事堂、右奥の矢印の建物が横浜正金銀行ニューヨーク支店(1929年に取り壊された)。

- ・ 紐育出張所支配人より電報あり。兔に角來談すべしといふ<sup>28)</sup>。
- ・ 正金銀行の雇人となる事を返電したれども心甚進まず<sup>29)</sup>。
- ・ 余は飲酒と成功の都會に住すべき運命を有せず<sup>30)</sup>。
- ・ 多感の一青年は忽ち世界商業の中心點なるウォールストリートの銀行員となる何等の滑稽ぞや<sup>31)</sup>。
- ・ 何等か罪惡を犯したるが如く又深き墮落の淵に沈みたるが如き心地して心中全く一點の光明なし<sup>32)</sup>。
- ・ 銀行のある所は東京にて申さば兜町蠣殻町とも申すへき處にて世界に有名な株式取引所此れ有り毎日毎日幾萬の人千金萬金を争へる様は誠に目覺しき

芝居に御坐候<sup>33)</sup>。

この感懐から窺えるのは、《中心》という意識の明確化とそこへいやおうなく放り込まれることへの抵抗の姿勢であり、また、職場環境を他人事に見るまなざしである。この《中心》から逃げ出す先としての《周縁》はどこにあるのだろう。母親宛の手紙には「父上にはないないの儀には候へど小生は銀行員として朽ち果つる心は無之、今一度如何にかして文學の方面に成功したき覺悟に御坐候」<sup>34)</sup>と本心を吐露している。しかし、「父上にはないないの儀」というのは、甘えた策略であろう。母親を通して父に自分の本意が伝わることは分かりきっているからである。

荷風の職場のあるウォール街は、600メートルぐらいの比較的短い道路ではあるが、単に世界の金融の中心だっただけでなく、アメリカの発祥の拠点（ニューヨークは初めてのアメリカの首都）でもあった。この通りにアメリカが集積していたと言っても過言でない。トリニティ教会、ニューヨーク証券取引所（世界最大の証券取引所）、フェデラル・ホール（アメリカ合衆国議会旧議事堂）があり、荷風は、ほぼその真ん中で、一年半を過ごすのである。

横浜正金銀行ニューヨーク支店は創設明治13年である。かつては日本の輸出品中最大価格を有する生糸が欧州を迂回して米国へ輸入されていた。それが直接米国へ輸出されるようになって、為替業務が重要となった。その上に、日露戦争戦費調達のための外債発行の大きな仕事が重なり、荷風の配属先は「日本政府外国公債利子支払課」というところで、荷風によれば「臨時雇人」の資格で勤め始める<sup>35)</sup>。本人は「親の七光りのおかげで、支店長始め皆親切にしてもらつて心配なく仕事をしてゐる」と母親あての手紙に書いている<sup>36)</sup>。

荷風はニューヨーク支店時代に高橋是清に会っている。高橋は、当時日本銀行副総裁であり、また、相馬のあとをついで横浜正金銀行の7代目頭取でもあった<sup>37)</sup>。戦費調達のために発行された外債引き受けのお礼に米国訪問の途路であった。荷風たち正金銀行の行員たちは“生稲”という日本料理屋で謁見をたまわった。下っ端も招待されて「こつちは低い處でお辭儀して、名刺を出して、“ヘエツ……”と言って歸つてくる」という思い出を後に語っている<sup>38)</sup>。“生稲”は当時、ウェスト街21丁目10番（10 West 21st Street）にあったニューヨーク随一の日

本料理屋で、外見はビルである。外に、小さく日本国旗を掲げていた。ちなみにこの料理店で荷風はフランスへの転勤に際して仲間から送別会をしてもらっている。

高橋是清という日本国家の《中心》と接点を持ちながらも、むしろその邂逅を戯画化して表現していること、その同じ料理屋で仲間に送別会を催してもらったという柔軟な（最小限の）社交性の保持。主催してくれたのは、榎本（おそらく榮三）<sup>39)</sup> という行員だった。リヨンへ着いて、一週間後に投函した同氏あてのはがきの内容は、銀行



荷風が高橋是清に会った生稲料理店

のことには一切ふれず、フランスの文芸出版物に興味があるという内容である<sup>40)</sup>。



リヨンよりニューヨーク支店の榎本に宛てたはがき（さいたま文学館所蔵）。

営にあたっていた<sup>41)</sup>。当時、行員数30名、内白人13名。帝国政府の外債に関する事務を担当した。すなわち、日本政府は日露戦争の戦費調達のためにニューヨークで外債募集をした（2億5千万円）のである。今西と一宮の二人はその貢献で勲章（それぞれ勲五等と勲六等）を受けている。また、今西兼二は、当時アジア貿易に関する決済のほとんどをニューヨークの香港上海銀行に独占されていたことに対して、アメリカ企業との関係を一

銀行員としてののかすかな接点を持ちながらも、《中心》へ踏み込むことなく、《周縁》へと遊離していく姿がそこに見られる。

荷風のいたニューヨーク支店の支店長は今西兼二と本店から補佐できた一宮鈴太郎（のち取締役支店長から副頭取になり、そのあと川崎銀行頭取になる）が経



荷風の採用面談をした横浜正金銀行ニューヨーク支店長今西兼二

一つ一つ開拓して横浜正金銀行へ振り向け、日本国の金融上の地盤開拓に最大の貢献をなした人物でもある。当時の在留日本人は、領事館登録数でほぼ1500人、推定で2500人ほどがいたと言われる<sup>42)</sup>。滞在者には、たとえば野口英世がいた。ロックフェラー研究所の研究者としてニューヨークでは医学の分野で盛名を馳せていたのである。このように、経済や政治の分野だけでなく、多くの人々が日本を背負って、いわば日本人の《中心》的存在としての矜持をもって活躍していた。荷風は、国際金融の只中にいて、このように日本帝国を支える極めて大切な仕事を（末端であれ）担当していたにもかかわらず、この重要性には一顧だにしていなかった。



支店次席の一宮鈴太郎

- ・ 受附口の窓をつけた金網の圍ひの中、タイプライタアと電話の響の絶え間もない金庫のかげのデスクに紙幣の勘定と帳付の役目、單調無味なる職務<sup>43)</sup>。

荷風は、むしろ《中心》にいることの意識を意図的に抹殺しようとするのである。

## 6

ニューヨーク領事館<sup>44)</sup>は、ウォール街60番地（60 Wall Street）にあった。横浜正金銀行とは通りをへだててほぼ向かいの至近距離にあり、荷風は当時ニューヨーク領事館書記官であった従兄の永井松三（荷風滞在后にワシントン大使館へ転勤し、さらにサンフランシスコへ転じた）とよく昼食や散歩をともにした。松三は、荷風からは



荷風離米時のニューヨーク日本領事館員（中央が総領事代理鈴木榮作）

「素川」という号で呼ばれる仲で、文芸にも理解があり、年齢も近いこともあって親しく交流をしていたのである。

ニューヨーク領事館は明治35年1月に総領事館に昇格するが、もとは横浜正金銀行と同居の形で、ワーレン通り97番地（97 Warren Street）にあった。1905（明治38）年に、ナッソー通り99番地（99 Nassau Street）に移り、次にこの地に移ってきた（最終的にブロードウェイ120番地 [120 Broadway] に移る）。ニューヨーク領事館はつねに横浜正金銀行と行動を共にしている。アメリカにおける日本国の中枢というだけでなく、当時の世界の《中心》（経済だけでなく、松三との関係では政治においても）に荷風がいたということは強調してもし過ぎる事はない。現代のわれわれが想像する以上に、当時の外交は政治だけでなく経済や軍事と緊密な関係をもっていた。たとえば、当時、ニューヨークには高田商會という商社があった。この会社は日本人4名、欧米人10名という小さな企業であったが、日本帝国陸海軍の用達商社であり、主に電気・機械をあつかっていた。この会社の住所が、日本領事館と同じウォール街60番地であったのである。つまり同じビルに同居していた。

そういう場において、荷風は《中心》を否定的に表現するために、単なる拒否の感情表明だけでなく、《中心》そのものが自分の肉体への加害者となるという捉え方をする。ときとして、過剰と思えるほどにその“被害者”意識が表明されていく。

- ・ 終日空気不良なる銀行の事務室に閉籠めらるる苦しさ譬ふべくもあらず<sup>45)</sup>。
- ・ ああ、何事も思ふまじ何事も見まじとて急ぎ銀行に歸り帳簿の上に顔ひた押當てぬ<sup>46)</sup>。
- ・ 銀行の勤務漸く苦痛の度を増し來れり<sup>47)</sup>。
- ・ 如何せん余の性情遂に銀行員たるに適せざるを（略）<sup>48)</sup>。

荷風は、ついに、病欠をする。

- ・ 心地すぐれず銀行の執務に堪へず家に歸りて臥す<sup>49)</sup>。
- ・ なほ病む。日本人醫師廣瀬氏を訪なう<sup>50)</sup>。

- ・ 發熱甚だし<sup>51)</sup>。
- ・ 惡熱去らず<sup>52)</sup>。

この間1906年9月15日から10月5日まで20日間休んでいる。『西遊日誌抄』に3回その名前がでてくるこの「廣瀨氏」は廣瀨藤五郎という。1901年帝大医学部卒、1903年ドイツ留学、1905年ニューヨークへ移り、同地で開業。当時ニューヨークには6人の日本人医師がいたが、廣瀨医師はイースト20丁目街214番地（214 East 20th Street）で開業していた<sup>53)</sup>。



荷風がしばしば診断をあおいだ医師廣瀨藤五郎

荷風の病気は、心因性のものであったようで、時間の経過とともに自然に治癒したようである。「銀行」と「病欠」という《中心》から《周縁》

への逃避という形はここでも見られる。この図式は、『あめりか物語』における短編「寝覚め」に象徴的に描かれている。次のようなものである。

主人公の澤崎三郎は日本の会社の駐米事務所の営業部長で、未亡人“ミセス・デニング”という若いアメリカ人女性を事務員として雇う。しかし彼女は遅刻を繰り返し、さらには、「病氣とやらで缺勤し初めた」。彼女の家を訪問すると「朝早くから起きて夕方までキッチンと椅子に坐つてゐるのが、いやでいやで……」といいわけをする。あげくに、「女は病氣をいい立てゝ是非にも辭職する旨をば、電報でいい越した」。彼女の家を再び訪れると、既にそこにはいなく、家主が彼女の不品行や家賃不払いを理由に追い出したのだという。彼女は男に体を売り、また裸体写真のモデルにもなっていたのである。澤崎は以前に、この女が「謎を掛けて自分を誘つた」のではないかということに思い当たり、「何故あの時、さうと気づかず、みすみす機会を逸したのであらうと、靴で敷石を踏鳴し、齒を嚙締めた。」

ここに描かれるアメリカ人女性の言行は、ほとんど荷風のそれである。男女の違いを入れ替えただけであるが、結論は「米國ほど道德の腐敗した社會はない」となっている。言うまでもなく、これはある種の“認知的不協和”を風刺的に描

いたものであろう。さらに、この短編小説は、未亡人デニングに仮託した荷風の中にある強い《中心》拒否と、それにもかかわらず《周縁》に思いきり踏み出せなかった（「みすみす機会を逸した」）、案外正直なルサンチマンを表明しているといえよう。ここに荷風のゆれの萌芽が垣間見られる。

## 8

荷風は、ウォール街を《中心》ととらえる意識<sup>54)</sup>から逃れるためにあえて肉体労働者たちのうごめく世界やマイノリティ社会や異国文化へそのまなざしをむけて行く。ここでのマイノリティは下層移民であり、異国は、非アメリカ世界、とりわけ後に考察するフランスであった。フランスに特権的な場が与えられているのは、より若い時代からの文学世界の“ミメシス”<sup>55)</sup>と明治時代の文学的風潮の影響であった。このフランスを利用することで、反アメリカ、すなわち今属している《中心》からの逃避を述べ立てる。次の一節などは、ニューヨークにおけるトポロジカルなその《中心》と《周縁》の対比の意識化であろう。

- ・ 銀行午餐の後一時間の休暇あるを利用しブルツクリン橋下の波止場を歩む。（中略）波止場を前にしたる海岸の大通には水夫労働者酔漢など數多徘徊せり。僅か一町隔りたる銀行街ウォールストリートの光景に比較すれば全く別天地の觀をなす。銀行街を通行するものは所謂文明の人なり。彼等は現時の流行服をつけ急し氣に賢こ氣に歩む。波止場に徘徊するものは即社會僞善の束縛より脱せる自然の人なり。酔へば路傍此れ其の家にして自由に一睡すべし<sup>56)</sup>。

《中心》として意識される金融街の風物と《周縁》と意識される下層労働者の風物の二項が鮮やかに対比されている。「僅か一町隔りたる」という対比表現に荷風の鋭敏な意識と描写力の卓抜さを見ることができよう。実際に当時は、ウォール街の63番地から荷役波止場のあるサウス・ストリート（South Street）まではわずか200メートルほどだったのだ。今日では忘れられていることだが、ウォール街というのは、潮の香のする港町だったのだ。かつては合衆国税関もこの通りにあった。マンハッタンは、その島の周囲から幾百の埠頭が角のように突出て

いて当時は海運の股販を極めていた。

この情景は、たとえば、おなじ海辺といっても、コニーアイランドについての記述と比べてみるときいっそう対比の妙が浮かび上がるだろう。

- ・「コニーアイランド」といふ夏の遊場（略）。およそ俗といつて、これほど俗な雑沓場は、世界中におよそ有るまい<sup>57)</sup>。

ここでは、アメリカ的な健全さの中に横溢する大衆の通俗性を荷風はみているのである。コニーアイランドはブルックリンの南端に世紀末に開発された海浜リゾートで、休日ともなるとニューヨークの「俗衆」で雑踏状態になるのである。この場合は、中心に対する周縁としての庶民でなく、中産階級で構成される深みのない健全さの横溢するアメリカ文化そのものへ倦厭感情が表明されているといえるだろう。荷風にとっては、労働者や下層階級の人々（いうまでもなく荷風の観念の中のであるが）は俗でない。それは《周縁》に布置されるからである。《中心》とも《周縁》とも定めがたいこの大衆を荷風は嫌ったのである。

## 9

荷風はアメリカの他の都市にはなかった《周縁》をニューヨークにはじめて見出すのである。貧民街や移民街である。描写には自らの身体をもって当たり、自己の精神との類縁性のある場として取り込んでいく様子が見られる。

- ・ イーストサイド 東 区 の移民街を散歩す。伊太利亞町の寺院に入りて舊教の禮拜式を見たる後支那町の酒場に入りて夜を深かしぬ<sup>58)</sup>。
- ・ 余は（略）支那街の一隅に佇立みてあり。除夜の一夜を騒ぎ明したる群集は（中略）狭き支那街より第三大通へかけて潮の如く來往せり。余は此の奇なる戯れを目撃して今夜の探検の空しからざりしを悦ぶ。支那料理屋に入りて食事せんとするに何處の家も雑沓極りなく一脚の空椅子だになし。此の邊りに住む賤業婦のつどひ集りて舞蹈する地の底の酒場に入れば立迷ふ煙草の烟雲の如く群集は各女を捕へて狂する如くに舞へり。余は曉三時に近き頃まで

此のあたりを歩みて歸りぬ<sup>59)</sup>。

- ・ 日暮東区の移民町なる酒場に食事し（略）ハンガリヤの俗歌に旅愁を慰む<sup>60)</sup>。
- ・ 曲馬を見る。（中略）此等の藝人の哀れなる生活（略）<sup>61)</sup>。
- ・ 東区にある猶太町の光景を寫生せんと思ひ立ちまづその邊の酒場に入りて晚餐をなす<sup>62)</sup>。

これらの「移民街」、とりわけ支那街には、まさに、荷風が思い描く《周縁》の基本的な要素の多くが見られる。すなわち、「群集」、「狭き支那街」、「此の奇なる戯れ」、「何處の家も雑沓極りなく」、「賤業婦」、「舞蹈する地の底の酒場」、「立迷ふ煙草の烟」、「群集は各女を捕へて狂する如くに舞へり」などである。この情景こそ荷風が自己の内に編制しようとする世界であり、だからこそ「余は曉三時に近き頃まで此のあたりを歩みて歸りぬ」という悦びとつながるのだ。

この《周縁》世界がもっとも端的に描かれるのが、『あめりか物語』のなかの「夜半の酒場」と「支那街の記」である。前者では、マンハッタンの「<sup>ウエストサイド</sup>西側」と「<sup>イーストサイド</sup>東側」を明確な二項として捉えている。すなわち「西側」は「新世界の大都會を代表すべき」地区として、一方、「東側」を「未成功者もしくは、失敗者の隠れ場所」とする。ニューヨークの地誌としては当然といえば当然なのだが、この「区別」の意識をあえて題材にする荷風の世界構成の感覚には注目してよいだろう。「東側」ではあらゆることが、《中心》の否定的な要素として編制されていく。この地区を荷風は、「汚い」、「貧民」、「ズボンのポケットには<sup>ウエスキ</sup>焼酎の小壘」、「唾」、「襤褸片」、「腐つた」、「破けた」、「小便」という用語を並べて、これを《周縁》の表象としていく。

「支那街の記」でも同様で、ここを描写するにあたっては、「闇夜」、「死人や、乞食や、行倒れ」、「ブンと厭な臭氣のする處」、「悪徳、汚辱、疾病、死の展覽場」というコトバを埋め込んでいく。ここで荷風は、「されば、紐育中の貧民窟と云ふ貧民窟、汚辱の土地と云ふ土地は大概歩きまわつた」と嘯く。《周縁》は徐々に明瞭な姿を見せ始める。

ブロードウェイなどの繁華街については、実はわずかな記述しかなく、とくに具体性や実感的な感情移入が見られないという「隠蔽された」表象にも注目すべきである。『あめりか物語』のニューヨークを題材としたもので、私たちの目を

惹くのは、“表舞台”でない部分ばかりである。支那街や猶太人街や伊太利亜街などの貧民街の、その裏町を題材にして描いた文章が面に立つことで描かれない部分は隠蔽された表象となって際立ってくる。すなわち《中心》が示差的に浮かび上がるのである。

猶太人街はリヴィングトン通り（Rivington Street）やヘスター通り（Hester Street）あたりにあった。伊太利亜街（Little Italy）はマルベリー通り（Mulberry Street）あたりに広がっていた。また、荷風が頻繁に彷徨した支那街（Chinatown）はこれらに隣接する形で広域に伸展し、当時から米国一広い中華街であった。いずれも荷風の職場であったウォール街からそう遠くない「東側」の中でもいわゆるロウアー・イースト・サイド（Lower East Side）地域に集まっていたのであった。

こうやって荷風は《周縁》を発見しつつ同時に嫌米意識を強めていく。荷風の中で《周縁》が逃避の先として創出されていくのである。

以下のアメリカ文化に対する嫌悪感は、じつはそれほど根拠がしっかりしているものでなく、あきらかにその先にフランスを浮上させる装置としても機能しているのである。言うまでもなく、その意図は、自らの口からだけでなく、従兄の松三の口を通して父親へこの厭米的気分とあわせて親仏の感情が伝わることだった。その意味ではこれはあきらかに企みである。

- ・ その頃、吾々は共に米國に居ながら米國が大嫌ひであつた<sup>63</sup>）。
- ・ 八つ當りに米國社會の全體をば、殊に藝術科學の方面に至つては、さながら未開の國の如くに罵り盡して、いさゝか不平を慰めるが例であつた<sup>64</sup>）。

これは『再會』という短編中で、かつてアメリカで一年余り親しく付き合い、数年後にパリで再会した蕉雨という雅号をもつ洋画家との会話として記述される。この思いは、先に引いた「何につけても、吾々には米國の社會の餘りに常識的なのが気に入らない」<sup>65</sup>）と続き、さらに「吾々には堪へがたい」という結論に到るのである。このように荷風のニューヨーク感（アメリカ感）をみていくと、その過程で外の世界（《周縁》）という意識の整序が行われていくのが見えてくる。

『あめりか物語』の中の「夏の海」には、極端なまで、荷風の“フランス感情”が露呈している個所がある。それは自由の女神像を見たときのことである。

- ・ 自分は此の銅像が佛蘭西より寄贈されたものである事を聞いて居るが、其の建設者なる一美術家の力を思へば、あゝ、神にも等しいではないか<sup>66)</sup>。

アメリカの象徴ともいべき自由の女神像を目の前にして、これほど唐突にフランスの美術家に思いを馳せるのは極端ではないか。金融と政治の中心にいる現在の自分がおかれたニューヨークという環境を《中心》とするなら、これに対抗するものは、《周縁》であり、それがここではフランスとなるのである。実際は、フランスこそが荷風の《中心》なのだが、ここにはフランスという《中心》はみごとに反転して《周縁》と化すという幻術が見られるのである。

あわせて、荷風は、返す刀で日本の《中心》を批判し、《周縁》を称揚する発言をする。

- ・ 思ふに日露戦争後は我國でも東洋を代表する大記念碑の類を建設する計画を爲すものがあるかもしれぬ。しかし美術の製作を土木事業と同一視してゐる日本政府の手によつてなら、自分はむしろそのやうな計画の起らぬ事<sup>こひね</sup>を庶がふのである。日本の美は（中略）、雲と亂るる櫻の花、蝶と舞ふ藝者によつて世界に知られ、愛されてゐるのである<sup>67)</sup>。

当時の荷風のフランスへの傾斜を示す言説を煩を厭わず挙げてみる。

- ・ 佛蘭西人の家に行きを移す。主婦は六十ばかり余はこれより日々佛語の會話を練習するの機會を得たるを喜ぶ<sup>68)</sup>。
- ・ 素川子と四方山のはなしの末余は米國の生活の更に余の詩情を喜ばずものなきを歎じ佛蘭西に渡りて彼の國の文學を研究せん事の是非を問ひぬ<sup>69)</sup>。
- ・ 油繪展覽會を看る。感服すべき作品一つもなし。亞米利加は駄目なるかな<sup>70)</sup>。

- ・ 西區卅二丁目邊の裏通は佛蘭西の移民町なり。佛蘭西の酒場ありて娼婦多くつどふ。揚代三弗より五弗位なりとぞ。(略) また内々にて如何はしき繪も賣るなり<sup>71)</sup>。
- ・ 余はこの灣頭遙に大西洋を望めばまだ知らぬ佛蘭西の都と其の藝術の戀しさに今の我が身の果敢なきを思ひ無量の悲愁に打沈めらるゝを常とす<sup>72)</sup>。
- ・ 佛蘭西語の夜學校に赴く<sup>73)</sup>。
- ・ 佛蘭西語の夜學校に赴かんとて(略) 街上の光景畫にて見る巴里の如し。覺えず佇みて空想に耽る<sup>74)</sup>。
- ・ 株式取引所より程遠からぬ横町に佛蘭西人の營める小料理店あり。余は銀行の歸途ここに葡萄酒一杯を傾け晩食をなすを常とす<sup>75)</sup>。
- ・ あゝ美しきミュツセの詩よ。余は銀行内にありても折あれば竊に衣囊より一卷を取出して默讀せり<sup>76)</sup>。

嫌米感情と身体の不調と銀行勤務忌避とはいずれも《中心》という穢土からの厭離願望である。このことを心配して父が何らかの配慮をしてくれるだろうという遠謀である。しかし、これが帰国命令になれば元も子もないから、フランスへの憧憬をちらつかせ、この願いを聞き入れてくれるなら正金銀行勤務を続けてよい、という思いを暗に父に伝えるのである。

- ・ 素川子と會食す。子語りていふ。君近頃銀行内の評判宣しからず解雇の噂さへあるやに聞及べりと<sup>77)</sup>。

いとこの松三が荷風の狂言回しに登場するのである。真の《中心》にいる松三の人望が巧みに利用されたわけである。

実際に、こうやって荷風のアメリカに嫌いや情婦との交渉ぶりやフランス語学習の演技は父への手紙の文面や周辺からの間接的情報操作で、みごと実を結ぶのである。結局荷風のフランス転勤が成功する。父親は相馬永胤を通して次の7代目頭取高橋是清にフランス行きを依頼したのだった。《中心》離脱の演技は、徐々に荷風の実体にもなっていく。

父親の尽力でリヨン支店へ転勤させてもらい、荷風はフランスへ渡る。

明治40（1907）年7月2日に転勤命令を受けて7月18日午前9時にニューヨークを出帆。この頃の青年荷風の肖像写真がある。巖谷小波宛となっている一葉には、“*le 10 juillet 1907*”（1907年7月10日）というフランス語自筆の日付と署名がある。出発の1週間前の署名である。ニューヨークには当時日本人経営の写真館が4軒あったが、この写真はおそらくブルックリンの「日本人教会」に住む杉山虎蔵に撮ってもらったものと思われる<sup>78)</sup>。荷風の高揚ぶりが感じられる。

荷風は、フランスの港ル・アーヴルに7月27日着き、船中で一泊、翌朝パリへ出て、ここでさらに1泊。その翌日、すなわち、明治40（1907）年7月29日19時20分、パリ発マルセイユ行き夜行列車に乗る。翌30日早朝3時半にリヨンに到着。深夜にホテルへ直行、半睡ののち、翌日リヨン支店へ直行している。この律儀さも荷風ならではのことである。ここでしくじれば、当然父親から帰国命令が来る。

横浜正金銀行リヨン支店はラルブルセック通り19番地（19 Rue de l'Arbre-Sec）にあった。町のほとんど中心である。ただし、中世からその名前が付いていたという薄暗い路地だった。この支店の開設は1882（明治15）年で、ニューヨーク支店が明治13年開設であるので、これとあまり変わらない古さである。言うまでもなく、当時の日本の輸出品の主力は、生糸であり、この生糸の世界マーケットの中心であったリヨンは、日本国家にとって極めて重要な拠点であったのである。横浜正金銀行リヨン支店は明治国家の中枢を担う為替決済銀行として設置されたのである。こうやって、荷風は自らの意図とは別に（父親の意向で）横浜ーワシントンーニューヨークーリヨンという日本の経済・政治にとっての中心線上を移動したことになるのである。ちなみに、フランスでは、正金銀行パリ支店はリヨン支店に遅れることほぼ50年の1931年（昭和6）になってやっと開設されるのである。いかにリヨンが日本にとっての拠点であったかが分かる。

事実、このころのリヨンは世界一の資金量をほこるといわれたクレディ・リヨネ銀行をはじめとして、45の銀行がひしめきあっていた一大金融市場でもあったのである。あいかわらず荷風には、この《中心》に参加するという意識が欠けている。それどころかますます《周縁》に傾斜していくのである。

荷風は『ふらんす物語』の中の短編「晚餐」でこう書く。

- ・ 場所は銀行頭取の社宅である。其の夜、自分は晚餐に招待されて食堂のテーブルにつくと、頭取は同じ席に着いた銀行員三名と、里昂に滞在して居る横浜の生糸商二名とをば一人々々自分に紹介して呉れた<sup>79)</sup>。

荷風がリヨンへ着任して間もなくにおそらく新人の荷風をまわりの関係者に紹介するために、支店長が自宅で開いてくれた内輪の夕食会だろう。時間は夜の7時から10時過ぎまで。ここでは頭取、頭取夫人、下女、銀行員三人、横浜の生糸商二人が登場し、そこでの日本社会に典型的な会話や生態が描写される。荷風のまなざしはつめたい。

この頭取宅は、ノアイユ通り（現在のフォッシュ元帥通り）54番地にあった。フランスの法人税法上「頭取」と呼ばれた支店長は小野政吉という。

小野政吉は、幕末の1864（元治元）年、京都下鴨に生まれ、7歳で単身フランス留学をさせられた人物で、パリで学び、のち15歳でリヨンに移り、リヨン高等商業学校で2年間学び、10年ぶりに帰国、東京専門学校（現早稲田大学）に入学し、1886（明治19）年に横浜正金銀行に就職、1898（明治31）年に33歳でリヨン支店長として赴任、23年に及ぶ現地生活をした。荷風は、小野支店長がすでに10年目の時に転勤してきたことになる。



横浜正金銀行リヨン支店長小野政吉と妻・梅、長男・敏郎（小野家所蔵）

この明治国家の潮流の《中心》にいた小野政吉を荷風は、極めて覚めた眼で観察し、その晚餐の席で交わされる会話の俗人ぶりを皮肉に描く。少なくとも、荷風には、この《中心》に参加する心組みがまったくない。

小野政吉はこの狭いリヨンの日本人社会では、その経歴や人脈やフランス語力

でも一頭地を抜いていたが、それと並べる力をもった日本人がもうひとりいた。

それは、日本領事館の領事山田忠澄である。山田は、小野と同様、明治初期の留学生で、リヨンのラ・マルティニエール工業学校（現在は同名の高等学校）へ留学し、そこで化学を学び、そのまま、帰国せず、リヨン市に開設された日本領事館に就職し、やがて領事となり、地元のフランス人女性と結婚、ほぼ30年間をリヨンで過ごした。当然のことながら、小野一家とは深い親交があった。

小野がいわば経済・金融世界の《中心》だとするならば、山田は日本官界のリヨンにおける《中心》であるが、その両方の至近距離にいながら、荷風はまったく関心をもたなかった。これはアメリカにおいて、経済世界の《中心》であるニューヨーク支店長今西兼二や頭取の高橋是清の傍にあっても関心をもたず、政治の《中心》の高平小五郎公使や全権大使の小村寿太郎にも極めて近かったにもかかわらず関心を懐かなかつたのとまったく同じ構図である。

横浜正金銀行勤務がフランス生活の条件基盤であるにもかかわらず、やはり荷風は、この勤務への嫌悪感を募らせていく。《周縁》の氾濫がはじまるのである。あるいは、《周縁》という虚構が実在化はじめ、さらには顕在化していく。このことは、次の文言から読み解くことができる。

- ・ ぼくは西洋に居たいばかりに、ふなれなソロバンをはぢき、俗人と交際して居る。しかし一度び、夕暮れと共に銀行を出れば、僕は全く生返つた様になつて直ちにカツフェーに赴いて音楽を聞くのだ<sup>80)</sup>。
- ・ 本書 [『ふらんす物語』] 収る所の諸篇、短篇小説、紀行、漫録のたぐひは大概當時の印象を逸せざらむが爲、銀行帳簿のかげ、公園路傍の樹下、笑聲絃歌のカフェー、又歸航の船中に記録したりしを(略)<sup>81)</sup>。

荷風にとっての《周縁》は、銀行執務中であれば「銀行帳簿のかげ」であり、



リヨン日本領事山田忠澄、妻マルグリット、左端がキク（山田順一郎氏所蔵）。

勤務時間外（しばしば仕事を無断欠勤した）であれば「公園路傍の樹下」であり、夜になれば「笑聲絃歌のカフェー」である。最後には、銀行から遁走するが、その代償に「西洋に居たい」願望も剥奪されることになり、帰国を余儀なくされた「歸航の船中」がこの時期最後の《周縁》である。

- ・ 年中同じ狭い室の中に閉込められ、同じ銀行の帳簿を同じやうに繰りひろげて居る身の上がつくづく厭になつた。外國に居るとは云へ狭い日本人の間に棲息して居ては東京の天地にせぐくま躊躇つて居るも同じ事。（中略）無宿浮浪の見世物師の境遇を更に詩趣深く思返した<sup>82)</sup>。
- ・ 銀行には赴かず終日床にあり<sup>83)</sup>。
- ・ 銀行辭職と決心し手紙を父の許に送る<sup>84)</sup>。
- ・ 銀行支配人の私宅を訪ひ辭職の意を告ぐ<sup>85)</sup>。
- ・ 銀行を休みてよりは俄に閑散の身となり精神追々安まり行くやうなり<sup>86)</sup>。

ただ、正金銀行での勤務内容が厳しいとか長時間労働であったとかいう事実はない。荷風がリヨン支店を去った後釜に來た瀧澤敬一は「營業時間は午前九時から十二時まで、午後二時から四時迄、土曜は半休で、毎日五時には歸れるから、勤務時間の正味は一週に三十二、三時間（中略）。從來この店では、沈香も焚かず屁もひらぬ生活を送つたものが多く（略）」<sup>87)</sup>と述べている。このように澁みきった閑な職場が気に食わないという不満なら分かるが、荷風の場合は、職業人としての不満ではなく、ひたすら「嫌」という感情がアプリアリに内在していたとしかいいようがない。

### 13

荷風においては、フランスの《周縁》の実景は、遊歩によって構成される風景として表現されるようになる。これはニューヨークにおいて、港湾や移民街への遊歩がその役割をはたしたのと同様である。ただ、『あめりか物語』に比して、リヨンでは、あきらかに風景への同化や観察がより切実に身体的になり、同時にその意識や意図も深化していく。荷風の記述の技法が研ぎ澄まされていくのであ

る。帰国後の荷風が成立するのはすでにこの時点だといって差し支えないだろう。

荷風は、パリでは、帰国までの二ヶ月をホテル住まいの物見遊山に過ごしたが、言うまでもなくリオンではより長い期間を銀行勤務と日常生活の中に生きたのである。多くの荷風評伝や解説文には、荷風の「パリ体験」と書かれているが、これは、荷風の帰国後の「パリでは」発言におおいに瞞着されているのである。荷風は、フランス体験を語るのに、リオンという日本読者には聞きなれない町の名前をあえてさけて、「パリ」と嘯いたのである。大方の日本人にとっては、現在でさえも、フランスといえば、パリなのであることをおもえば当然ではあるが。

荷風のリオンを描くまなざしには、空間感覚の裏打ちが感じられる。それは距離感や方向感覚や時間感覚、そして季節の感覚のいずれもが体験的で、いわば皮膚感覚や呼吸をそこに感じられるのだ。

このことは、『あめりか物語』における（ニューヨークを舞台にした作品の一部を除く）アメリカの描写との質の違いを生み、また、『ふらんす物語』におけるパリの描写ともかなり異なる“実感”を与えている理由でもあろう。

試みに、『あめりか物語』と『ふらんす物語』の二冊の著書をもって、舞台となる町や地方を歩いてみるといい。リオンやニューヨーク（の一部）においてのみ、情景が際立って実感的であることを知るであろう。

しかし、これを単に、生活体験があったからだという理由で語るべきでない。その情景のリアリティを描出する技法が、ちょうど正金銀行に勤めだした頃と機を一にして生まれてきたことに着目したほうがよい。それは《中心》がのっぴきならない力で彼に迫り、それに比例して彼の反発力が鍛えられたからだと考えられよう。荷風の反発のモメントは、《中心》から外に向かわざるを得ないと同時に、必然的にそれが《周縁》を探す目つきにならざるを得なかったことにある。帰国後の荷風の諸作品における東京の風景感が際立って実感的な《周縁》であるのは、この延長にあるからであると解釈したい。

一般的に言うなら、《中心》におかれたひとは、この状況に居続けられることを願い、またよりよく順応するよう努めるだろう。それは時代や世界の“権力”への幸運な参加の機会であるからだ。もちろん、それが成功するとは限らない。それでも人は、その状況は失ってはならない好機だと理解しているから、努力をしてでもその一端から零落しないようにするだろう。世間を凡庸に過ごすとはこの

ことだ。

はじめからこの《中心》に与れない人々の中には、這い上がることを試みる者もあるが、一般に大方の人はその関心を抱くことを諦める。ところが明治という時代には、人々には“上昇”志向することが、あたかも国家の要請であるかのように奨励された。やや図式的に言うなら、学問は「すゝめ」られ、国は富むように、兵は強くなるようにと人々は刻苦奮励した。この流れに背をむけた生き方を保持するのはあまりほめられたことではなかったはずだ。ところが、荷風は、この後ろ向きの生き方の中に、時代に対しての批判精神を見出し、また、自分を含めてこのような人たちに受忍や節度の精神が養われているのを感じるのである。つまり偉大でなくとも凡庸ではない生き方をそこに見出すのである。

この状況にある人々を荷風は肯定的に見出して、自分の精神との類縁性を繋ぐ。荷風自身は、先に述べたようにあきらかに《中心》に生まれ育った。ここにアンビヴァレントな心組みが生まれる。《中心》にもいたくないが、一方《周縁》そのもので生きる事はできず、そこに、まなぎしの《周縁》を磨き上げる心組みが生じたのである。

これが後の有名な『花火』の一節だ<sup>88)</sup>。《中心》離脱宣言であり、《周縁》志向の意志表明である。「この折ほど云ふに云はれない厭な心持のした事はなかつた」と大逆事件に際しての国家の対応に嫌悪を感じた荷風は「私は何となく良心の苦痛に堪へられぬやうな気がした」が「何も云はなかつた」と述べる。まさに《周縁》への逃避の正統性の宣言にこのエピソードをみごとに用いたのだ。この意味でも、比較文学などで必ず持ち出されるゾラなどが荷風文学と何の関係もないことがよく分かる<sup>89)</sup>。荷風は、大逆事件を社会問題化して社会小説を書くこと自体が、すでに《中心》にコミットしていることになる、ということを経験的に知ってしまったのだ。政治的であるのは、いかなる信条に立とうともすでに《中心》志向だからだ。

14

ここから、荷風のリヨン叙景を通して、その《中心》と《周縁》のありようを考察していきたい。

荷風は、ある夏の夕方船で郊外散歩にでかける。ソーヌ川を遡るのである。

- ・ ソーンの河岸通に出で、牡獅子の立つサンポールの石橋の袂から田舎行の電車なり、河筋通の小蒸汽なり、何れにしても河の流れを遡つてリヨンの郊外遠く散歩に行くのを例として居た<sup>90)</sup>。

この夏の郊外への河上散歩が決して心浮き立ついわゆる観光風の短編にならないのは、その独自の風景描出の技がそこに展開するからである。

- ・ 行手の河上は流れの緩かに曲るまゝ、河岸通りは市の膨脹を示す新しい人家の列、其の後を限つて兩岸に高く聳る小山の中腹には、處々に要塞の壊れ跡かと思はれる古びた石垣があつて、瘤だらけの痩せた樹木が其の間から苦し氣に生えて居る様何となく物寂しい<sup>91)</sup>。

この作品ではソーヌ川の比較的忠実な遊覧紀行が語られているのだが、単なる風景描写でなく、このように随所に「物寂しい」モノを探し出そうというまなざしが顔を出すのである。

- ・ 突然河の流れは堅固な堰で中斷せられ、溢る水は低い瀧となつて落ちるあたり淵は蒼々として物凄い程である<sup>92)</sup>。

船はこの堰のすぐ上流側にある「髯イル・バルブの小島」(Île Barbe)に着く。かつては草木の生い茂る島で、その姿が、アゴヒゲのようだったことからそう名づけられたという俗説語源があるソーヌ川に浮



ソーヌ川上流(当時の絵はがき)。川船遊覧はこの川を遡っていく。右正面の丘がモン・ドール山。



髯の小島の手前にあった堰と閘門(現在は撤去されている)。

かぶ中の島である。南北560メートル、東西125メートル。両岸から「髻の小島橋」が架っている。これは吊り橋である。荷風は、この小島に下船する。

- ・ 「髻の小島」の前方は公園になつて居て涼しい木の下で肌抜きになつて玉投の遊びをしてゐる連中もある<sup>93)</sup>。

まず、労働者らしき人々の姿を描出する。「玉遊び」はフランスの庶民の男の熱中する屋外の遊びである。南仏でペタンクと呼ぶ遊びである。この労働者風の男たちの後ろに、荷風の目が捉えるのが次の風景である。

- ・ 其の後は古木の蔭に寂しい土塀を廻らして住む人もないのかと思ふ一構へ。昔は修道院、今は尼寺となつた名所と云へど、名残の建物は幾百年の木立の奥ふかく、其屋根さへ見せず、水上に築き上げた石垣はまつはる野蔦と蒸す青苔に蔽はれて何の物音さへも外へは漏らさない<sup>94)</sup>。

「寂しい土塀」、「住む人もない」、「昔は修道院、今は尼寺」、「幾百年の木立の奥深く」、「野蔦と蒸す青苔」、「何の物音さへも外へは漏らさない」と、この明るい夏のソーヌ川河畔の風景から意図的に《周縁》としての世界を切り取って“発見”していくのである。

荷風は、このあと、ソーヌ川をさらに遡り、クーゾンという小村に到っている。今日、クーゾン・オ・モン・ドール (Couzon-au-Mont-d'Or) と呼ばれる村である。

- ・ 村は大概細い一條の石道で、山手の前の平地、もしくは石段で山の麓まで上つてゐる事もある。いづれも百戸二百戸位の小村でありながら家屋は互に密接し非常に狭苦しく立込んで居て、他村の襲來でも恐れたやうな中世紀の強い保守的な面影を残した處さへある。道の敷石はでこぼこに磨りへつて居て何とも云へない古色を帯びた石塀の曲がりくねつた角々には (略)<sup>95)</sup>。

村は、リヨンからほぼ13キロ上流にある人口962人（荷風の訪問時）の古い小さな村である。さしたる名物も名所もない、フランスならどこにでもありそうな

ひなびた村である。ただし、ここは、絹織機械の画期的な技術を考案したジャカールの家系の出身地として知られている村なのである。荷風は、もちろんこの村を訪れても、当時の日本の基幹産業であった生糸、絹織物との結びつきなどに思いを馳せることはない。横浜正金銀行リヨン支店での仕事とも結びつけることもない。ひたすら述べているのは、この村の「非常に狭苦しい」、「中世紀」、「でここに磨りへつて居」る敷石、「古色」などの様子である。この情景を背景に荷風は、この村に架かる釣橋を場面の転換に利用し、ここを渡って村へ入るジプシーの一团を描く。

- ・ 浮浪。無宿。漂泊。嗚呼其の發音はいつもながらどうして斯うも悲しく、又懐しく自分の胸の底深く響くのであらう。浮浪、これが人生の眞の聲ではあるまいか<sup>96)</sup>。

短編「蛇つかひ」の後半（「三」、「四」）で荷風がみせるジプシー（現在の呼称“ロマ”）の習俗や生活現場の描写。本物のジプシーを間近に観察して、これを活写するその目の確かさと筆の技にはだれしもが驚嘆させられるだろう。リヨンのクロワルッスの丘の町で毎年11月に行われる地元で“ヴォーグ”と呼ばれていた縁日に参集したジプシーの生態や見世物小屋や踊りなど、浮浪の民への異様と呼んでもよい執着は、荷風の《中心》への（無）関心から生まれたものだと言って差し支えないだろう。これこそ荷風の《周縁》への情熱であり、フランスへ来て、はじめてニューヨークから芽生え始めたこのまなざしの技術の開花としていいかもしれない。ジプシーの生態の描写は精緻であるので、その全容を示したいところだが、紙幅の関係でその一部を引用するにとどめる。

- ・ 窓をつけた古い汽車のやうな荷車の屋根からは食物を煮る細い烟が立つて居り、車と車の中に引張つた綱には洗濯した薄ぎたない肌着が下げてある。其の下には梳いた事もないやうに髪を亂した女がブリキの手桶に汲んだ水で皿小鉢を洗つて居る。日にやけて垢ぢみた顔の男が寝ぎたなく午睡して居る<sup>97)</sup>。

さらに「立派に一部落の形成を示してゐる」ジプシーの一群に立ち入って詳細

な描写をする。荷風は、ニューヨークでの支那街に興味を持ったが、これほど立ち入って間近にはその情景を描写するに至っていない。その結びに、私たちは荷風の“開眼”に立ち合う思いがする。

- ・ 自分は何だか妙に悲しい気がした。赤子を持つた母の姿。それが原因であらうか。さうとも云へるし又さうでないとも云へる。「悲しい」と定めたのが或はよくないのかも知れぬ。悲しいやうな一種の薄暗い湿つた感情を覺えたとても云直して置かう<sup>98)</sup>。

この「悲しいやうな一種の薄暗い湿つた感情」こそが荷風の《周縁》の風景を決定付けるものかも知れない。

15

荷風は、リオンを舞台にして「船と車」、「ローン河のほとり」、「秋のちまた」（以上の三作品は初版では『あめりか物語』付録の「フランスより」に収められている）、「蛇つかい」、「晚餐」、「祭の夜がたり」、「霧の夜」（初版では「除夜」）、「橡の落葉」に収められている散文詩「休茶屋」「ひるすぎ」（初版では「午すぎ」）「舞姫」などの小品と『西遊日誌抄』で《周縁》を描きこんでいくのである。

リオンを貫流するローヌ川をめぐるでは、ソーヌ川へのまなざしとあきらかに異なり、河岸の風物や川面に「悲しいやうな一種の薄暗い湿つた感情」を見出していくのである。

- ・ 晝の眺めより夜がよい。其の夜も晴れた月夜や星の明い夏の夕よりも、今夜のやうな陰氣な湿つた暗い晩、もしくは鉛色した霧の濛々と立ちこめる冬の夕暮に如くはない<sup>99)</sup>。
- ・ 毎日の濃霧天地は永遠の黄昏なり。然れどもロオン河上の暗澹たる景色却て歩を停めて打眺むるに好し<sup>100)</sup>。

すなわち、昼と夜、晴れと霧、夏と冬というような二項が設定され、常にその

その“薄暗い湿つた”事象の方へ傾斜する心性を吐露するのである。

試みに、掌編「霧の夜」での芝居小屋の描写で見てみよう。「湿つた寒いやな天気」の「何となく悲しいやうな」「夕暮れから殊更深くなつた霧」の大晦日の夜にふと目に付いた場末の芝居小屋へ入るという設定、それ自体が、すでに《周縁》状況であろう。この芝居見物記を読むと、フランス人でもあの時代の場内をこれほど臨場感あふれる筆で描出している人は稀ではないかと思わせる。もちろん、この観劇の叙述も、寄席小屋の哀れな場末感について「堪へられない」ことを縷々述べるための材料であることはいままでもない。

場内の様子やたむろする人々の描写にはじまり、観劇の風俗、舞台上で繰り広げられる芝居、老女優の醜い姿、無理に声を出して歌う流行歌<sup>はやりうた</sup>の「不快と云ふよりは見る目もいとゞ氣の毒」なさまなど「場内のもの一ツとして悲惨ならざるは無い」という“感情”に収斂していくのである。

リヨン市内では、旧市街がとくに散策の対象となり、裏町、露地、抜道、陋巷を、霧や暗闇などを背景にして詳細に描きこんでいく。ときに、その暗い裏町での薄汚い売笑婦との交渉などが配置される。アメリカでは体験する事のなかった薄暗い中世的な旧市街での、排水路か道路か区別のつかない石畳の路地や「抜裏」は的確に《周縁》風景として捉えられていく。

- ・ 曲りくねつた横町や路地裏に這入ると淋しい四邊のさまは一層深く身に迫るのである<sup>101)</sup>。
- ・ 鼠色した古い壁塗の人家は雨に濡れたまゝ、灰色の空の下に蹲踞<sup>うづくま</sup>つて居て、其の窓々は（中略）何の活氣も、何の人氣もない<sup>102)</sup>。
- ・ 人通りと云つては折々身なりの見すばらしい女が、洗濯物なぞを入れた手籠を片腕に引掛けて、裏通りから裏通りへと、早足に抜道するばかり<sup>103)</sup>。
- ・ 佛蘭西の街は米國とは違つて不規則な小路やどこへ通ずるとも知らぬ抜裏が多い。忽ち自分は暗い霧の中を唯ある小路へ迷入つた。やつと荷車が通れる位な道幅で、兩側に立つて居る低い石作りの家屋は汚れた黒赤い瓦屋根の半ば傾き、扉の落ちた窓の数は少なく、土塗りの壁の憂鬱な事はまるで牢獄のやう。底の厚い靴を穿きながらも歩けば忽ち足の裏が痛くなる程凹凸した敷石の處々の凹みには、えたいの知れぬ汚水が溜つて居て、何處から來るとも

知れず、何の光とも知れぬ光を受けて其の面は氣味わるく光つて居る<sup>104)</sup>。

「抜裏」と荷風が言うトラブルというのは旧市街の密集した古い家屋の入り口からはじまる暗い迷路のように作られたトンネル状の回廊のことで、そこを通り抜けると別の道にでるというリオン独特の家屋内隧道である。これが街の到る所に巡らされていて、その総延長は35キロあると言われる。当時は、その多くの廊下とも、路地裏ともトンネルともいいがたい部分は、汚水も流され、まさに「覆いのない下水」状態であった。

こういうリオンの旧市街を荷風は「何處をどう行くとも知らず無暗と歩」きつつ、自分のアンビヴァレントな心情を確認していくのである。すなわち、「闇が誘出す原因の無い不安と恐怖」から逃れて賑やかな不夜城のようなカフェへ逃げ込みたいのだが、足の方は「暗い霧の中」を裏町へと向かうのである。その理由は、カフェのガルソンの働きぶりなのである。「テーブルの間をてんでこ舞つて居る哀れな給仕人」<sup>105)</sup>の“不幸な”職場を見ると、まさに《中心》に行く思いがするからである。中心といっても権力のそれではなく、むしろ《中心》が演出している「哀れな給仕人」の生活である。「人一倍安逸と懶惰を好む自分にはあのやうに忙しく動いて居るものを見ると、堪へられない程氣の毒になつて、盡きぬ生存の憂苦を思ふが常」<sup>106)</sup>なのである。

この裏町に人形芝居を見せるところが何箇所かあった。この場所へも荷風は入り込んでいるのだが、この記述も当時の人形芝居上演をした現場を再現して極めて貴重なものである。

- ・ 里昂にはこの土地固有の人形芝居あり。行きて観るにいと狭き場内に瓦斯の燈暗く便所の臭氣鼻につきて陰惨限りなし。人形遣の臺詞唱歌、囃子方のキヨロンの音皆路頭に物乞の唱ふ歌に異ならず。この夜のさま印象甚深し<sup>107)</sup>。

リオンの人形芝居はギニョールという名前で知られるこの土地固有の娯楽である。いまではギニョールは指人形の代名詞になっているが、もともとは、登場人物の名前だった。

このギニョールは絹織産業に由来するといってもよいほど両者の関係は深い。

絹織物の職工達の世界で生まれたからである。彼らは、多くの娯楽組織をもっていたのだが、先の“ヴォーグ”という11月上旬の縁日などと同様、ギニョールも絹織物産業に携わる労働者たちに受け入れられ、育てられたのである。

主人公ギニョールと、彼といつもつるんでいるニャフロンという可笑しい顔をした二人が繰り広げるばかばかしいドタバタ劇である。

ところが、人形劇なのに、観客は子供ではないのである。狭く薄暗くタバコの煙の立ち込める室内で大人たちを相手にした見世物だったのである。専用劇場は、荷風当時はリヨンに三軒あり、荷風は、そのうちでラルグ路地（パッサージュ）にあった“ラルグ劇場”に行ったと思われる。ここは、地下にある劇場で「臭氣鼻につきて陰惨限りなし」という環境だからである。荷風の目的は、そこにたむろする女を求めることだったかもしれない。というのは、この劇場は、風儀の芳しくないところとしても知られていたからである。目の付けどころを誤らないのは、荷風の《周縁》を求める目が確固たるものになっていたからとも言えよう。

## 16

冬の始まりに町をあげて行われる夜祭り、夜のカフェ、霧の夜の旧市街での大晦日の貧しい労働者の境遇、さまざまなリヨン生活の生々しい局面を巧みに取り込んで、的確に（まるで写真で撮られたかのように）情景描写を重ねながら荷風の世界の《周縁》が構成されていくのに私たちは立ち合うことになる。そこでは、もはや《中心》へはまなざしを向けられる事がなくなっていく。

描かれるのはほとんど常に、“壊れた”とか“痩せた”とか“汚い”とか“物寂しい”とか“哀れ”とか“暗い”とか“悲惨”とか“貧しい”とか“雨”、“霧”“裏”などの用語で染め上げられた風物である。それが空疎な絵空事になっていないのは、さきほどふれたように、その描写が極めて写実的だからである。このことは、一世紀後の今でもリヨンで、一つ一つ検証して明らかにすることができる<sup>108)</sup>。

「霧」ひとつ取っても、その描写は夏目漱石におけるロンドンの「霧」の体験<sup>109)</sup>より深く“文学化”されていく。漱石の場合は、濃霧に呑み込まれ狼狽し、そこから逃れるべく右往左往し「自分はまた暗い中にたつた一人立つて考へた。どう

したら下宿へ歸れるかしらん」という結びになっている。作品の狙いは、濃霧に右往左往する異邦人の悪夢とでもいうものであり、それはそれとして興味はある。一方荷風は、文学の素材にするべくこの気候事象へ踏み込んでいく姿勢がある。《周縁》演出に用いようという心組みなのである。

- ・ 外に出ると何と云ふ恐しい霧の夜であらう。歩かうとする足許さへも見え分ぬ程で、呼吸する度々烟で燻されるやうに思はず咳嗽が出るのであつた。久しく冬の夜の霧には馴れてゐるものゝ餘りの事に佇んで<sup>あたり</sup>を見廻すと、街燈は黒幕で密封されたやうに全く光を失ひ、天地はさながら創世當初の混沌を思出す様に人も家も樹木も一齊暗黒の中にもやもやしてゐる<sup>110)</sup>。

この描写は、漱石のように「倫敦の街を散歩して試みに痰を吐きて見よ、眞黒なる塊りの出るに驚くべし何百萬の市民は此煤煙と此塵埃を吸収して毎日彼等の肺臟を染めつつあるなり我ながら鼻をかみ痰するときは氣の引けるほど氣味悪きなり」<sup>111)</sup> という「氣味悪」さからの“逃げ”の姿勢とは異なる。荷風は、積極的にボードレールに倣い《周縁》の心象風景として取り込もうとするまなざしをはたかせているのである。

- ・ 自分は夜と云ひ、霧と云ひ、猫と云ひ、悪臭と云ひ、名も知れぬこの裏道の光景が作出す暗澹たる調和に魅せられて、覺えず知らず、巴里の陋巷を歩みも遅くボードレールが詩に悩みつゝ行く時のやうな心持になつた<sup>112)</sup>。
- ・ 忽然、物音が聞えた。野良猫の影が四方に散つた。自分は驚いて目を見張ると、やがて眞暗な霧の中から、かたりかたりと木靴の音を響かせて現<sup>あらはれて</sup>出たのは二人の女の姿である<sup>113)</sup>。

このように、単に呼吸を苦しくする忌まわしい霧から逃げようとする漱石に対して、荷風は、あえてそこへ足を踏み込むのである。この踏み込みは、輝かしくあるべき《中心》にあたる横浜正金銀行の仕事や当時の政治・社会と自分の位置に関する関係性への関心の欠落と見事に相関している。

- ・ クロワルッスの高臺は昔から由緒のある機織ばかりが住んで居る古い街で、日中はたまさか通る電車にも乗客少なく、建て込んだ石造りの家の、到る處休まず倦まず、單調な梭杼の響の聞こえるばかり<sup>114)</sup>。

この家内工業の貧しい人々の労働が日本の絹糸や絹織りと深く関係し、そのおかげで今の為替業務の仕事があるのだという思考回路が存在している様子はまったくない。

ちなみに、とうじ世界で主流だった絹織り機械“ジャカード織”の発明者ジャカード（フランス語ではジョゼフ・マリ・ジャカール（1752-1834））がリヨンの人であるということについての言及は荷風にない。実は、ジャカード織については、京都府が、すでに1872（明治5）年に西陣機業関係者3人をリヨンへ派遣して、ここで学ばせ、帰国時にこの機械を持ち帰らせている。当時日本で織物産業に携わる人でジャカードの名を知らない人はいなかったはずである。

荷風が滞在していた二十世紀初頭で、絹織に関係する業者（機織、加工裁縫、染色、デザイン、商店、貿易商社など）はリヨンにほぼ1000軒はあった。荷風のリヨン時代の統計によると、絹（生糸および撚糸）集散地のアジアにおける1位は横浜（年間4,650トン）であって、2位の上海の3,830トンや広東の2,050トンより多く、一方消費のヨーロッパでの1位はリヨン（7,010トン）で2位のチューリヒの1,530トン、パリの170トンを大きく引き離していた<sup>115)</sup>。この現実に織り込まれていながら、日本の基幹産業である絹製品とか日露戦争勝利とか国際貿易とかから意図的に背をむけひたすら《周縁》へと傾斜していくひとりの青年からまさに“独自の姿”をまとった作家永井荷風が生まれたのは、この辺りではないかという感を深くする。

『あめりか物語』は明治41（1908）年8月に出版されたが、『ふらんす物語』は発売直前の明治42年3月27日（内務省告示では29日付け）に「風俗壞亂するものと認む」ということで「發賣頒布禁止および差押の處分」を受けた<sup>116)</sup>。当時の内務省はその具体的理由を明らかにしなかった。“風俗壞亂”という漠然とした

裁定だったが、明治国家への権力批判だけでなく日本人一般の愚昧さや、醜さなどを批判し、当時の日本国家の体面を棄損するような言辞が多いことがその理由だと推測されている。

しかしながら、この作品は具体的な国家批判と言うような内容をもっているだろうか。『ふらんす物語』になると、『あめりか物語』と異なり、荷風の《周縁》が圧倒的に横溢し始めていることは上で検証した通りである。このいわば、《周縁》という印象こそが発禁処分の要因となったのではないか。

じつは、荷風は発禁処置をうけたことにあまり強い反応をしていないのである。「私は『フランス（ママ）物語』の發賣禁止については別に何とも思つて居ません」と繰り返し述べている<sup>117)</sup>。荷風は、すでに原稿料（125円）を受け取っていたこともある。しかし、なにより、荷風は、この“禁止”を自己の反《中心》世界が公に認知された証として肯定的に取ったからこそではないだろうか。公に認知された自己の在り様の確立を内心悦び、発禁処分はこの満足で相殺されたのではないか。荷風は、この年、引き続き発禁処分を受けた『歡樂』で「（詩人が国家行政の機関から）迫害されるのは當然の理ではないか。（中略）詩人は實に、國家が法則の鎌をもつて、刈り盡くさうとしても刈り盡くし得ず、雨とともに延び生ずる惡草である。毒草である」と述べている。「惡草」は《周縁》にはびこる草である。

もちろん、荷風は、それなりに『ふらんす物語』が発禁になった理由を推測していた。その中に収録された「放蕩」や「脚本 異郷の戀」（戯曲）などがひっかかったのではないかと。

「放蕩」は後に内容の一部変更と共に「雲」と改題された上で、『ふらんす物語』に再録された。

その中で主人公の外交官小山貞吉の思いを記述した部分（「戦争の結果なぞ殆ど考慮すべき問題でない」や「自分はどれほど他人から推薦されるとしても、とても安じて將來公使や大使になり濟ます勇氣はない」など）はたしかに問題視される可能性があったのかもしれない。そう判断したから変更・削除した形で出しなおしたのだろう。しかし、少し注意して読めば、さらに削除すべきだったであろう表現もほぼそのまま残されている。たとえば、「燈火の巷に放浪し、國を憂ひず（中略）一朝、歡樂極つて、哀傷切なる身の上は、何と云ふ風情深い末路

であらふ！」と外交官に言わせるくだりなどである。また問題とすべきなら、この小説に流れる思想そのものを指弾しなくてはならない。要するに、国家にも職務にも忠実でなく、怪しげな女性たちと退嬰的に遊んで放恣な日々を過ごす外交官の日常、という設定そのものである。しかしこの基本的な筋は改変されていないまま、以後発禁処分を受けていないのである。

一方、「脚本 異郷の戀」は『ふらんす物語』から削除されたまま、お蔵入りした。そもそも『ふらんす物語』に編むのには場違いな作品であったこともあろう。というのは、この戯曲の舞台はニューヨークだからである。むしろ『あめりか物語』に挿入すべきであった。それだけでなく、この作品は、荷風としては満足の行く質に至っていないかと判断したのではないか。

「脚本 異郷の戀」には、米国人たちを交えての夜会の会場で、登場人物の一人藤崎という日本人が日本の近代文化への激越な風刺的言辭（これは、ほとんど荷風のそれであろう）をふりまく場面（「第二幕」）がある。これに激昂した建部という別の日本人が「實にけしからん。彼奴は非國民です。國賊です。誅罰を加へなければならん」と皆の前で糾弾する。この藤崎の思想は、近代化に邁進する明治国家への辛らつな批判であるが、建部に「國家の名譽を毀損した罪人だ」と言わせ、また両者の間をとりもつ“良識的”な初老の実業家山田も設定してあって、作品としてはこの場面の議論に均衡を持たせる工夫もされている。

ただ、その場面はこの戯曲の中心テーマではないこともあきらかである。テーマは、先行きに絶望し懊悩する二組の日米恋人の悲恋物語である。そのうちの二組（鈴木一郎とクララ）は別離を覚悟し、もう一組（小林丈吉とアンニイ）は心中を決行する。鈴木は、コロンビア大学の学生、クララは深窓の令嬢、もう一方の小林は、渡米したものの身を持ち崩した日本人青年、アンニイは娼婦。懊悩の原因は「人間の感情を殺す“日本”と云ふ情實を後に背負つてゐる」ことにあるという。このために恋は成就しない。すなわち別離が心中である。ほとんど歌舞伎か浄瑠璃の世話物世界の展開である<sup>118)</sup>。切腹が自殺でないと同様、心中も恋人同士の自殺ではなく、共に死ぬ事で表現される愛の成就だとするなら、極めて日本の伝統芝居の精神そのものがこの物語の底流にしつらえてある。言うまでもなく、懊悩する二人の日本人は在米当時の荷風の分裂した内面だろう<sup>119)</sup>。

そうすると、問題の第二幕あたりを削除したとすると、残る部分は、ニューヨ

ークを舞台にし、登場人物をアメリカ女性に設定しながら、いかにも古色蒼然たる日本的な悲恋ものあるいは情死ものの台本ということになろう。荷風は、このいささか古めかしい作りの作品を残す意図を積極的に持たなかったのもそういう判断があったからではなからうか<sup>120)</sup>。

いずれにせよ、実際のところ、藤崎の発言部分と発禁との因果関係はよく分からないというほうが正確だろう。むしろ発禁の理由はその政治思想などではなく、全体を被う頹廢的な“気分”ではなかったか。

## むすび

荷風に《周縁》世界への志向が明確に発生し始めたのは《中心》とでも名づけられる世界に濃密にコミットした銀行員生活時代からではないかという検討を行ってきた。

《周縁》は、アブリオリに存在するのでなく、《中心》から排除される世界であり、《中心》はまた《周縁》から相対的に浮上する世界でもある。このような相互依存の単純な二項をまず立てて、荷風における二種の世界の区分や《周縁》の卓越化現象の成立をみてきた。この枠組みは当然変容のシフトをも行いつつ最終的に、荷風の作品と内面世界が重なっていく過程を検証した。このように成立した《周縁》こそが荷風の独自の姿の基本的要素だといえるだろう。

昭和13年の短編作品に「女中の話」というのがある。この小説は巧みな筋立てと艶のある文体で読ませる掌編だが、興味があるのは、そのおわり近くで、この女中の話にかこつけて、語り手（荷風）が感想を述べるくだりである。置手紙一枚で家を出てしまった元女中について、その身の上を知ると、彼女は本当の意味で強いのだろうか、その強いと言うのは、むしろ、弱者が鼓舞され強いられるある種のやむをえない強さではないのか、という感懐を述べるのである。

- ・ 強者を稱美し、強者を崇拜するのが今の世に活<sup>いき</sup>る人の義務のやうになつた。そして、強者になりたくもなれない者が、自らその弱きを知つて諦めの道に入らうとすれば、世はこれを目して卑屈となすよりも、寧ろ狡猾奸譎<sup>かんげつ</sup>として憎み罰するやうにも思ひなされて來た<sup>121)</sup>。

そういうことを荷風が思うのは、「市中の踊場は其入口から壁から便所の中まで、隈なく」「御觸書」が貼出されはじめたことからの連想なのだ。その「御觸書」とは「強く生きよとか、強くなれとか云ふ言葉である」。

荷風は、この「御觸書」を「甚しく人の感興をそぐ」と書くのみで、直接に意見や主張を述べない。しかし、読めばだれでもが、ここにこの世にたいする荷風の言い知れぬ嫌悪感がただよっているのを感じ、「自らその弱きを知」っている荷風に重ねて読むだろう。「女中の話」は、昭和13年2月の執筆となっている。ちょうどその数ヶ月前に日華事変が勃発している。荷風の肌は、その兆候を極めて鋭くとらえていると言えよう。それはほとんど本能的な感覚ではないだろうか。こういう「弱者」の感覚こそが荷風の生きるための意識の本来の枠組みではなかったのか。

「強くあれ」と喧しい《中心》形成の言説への言いようのない居心地の悪さ、そこから逃避しようとする意識の枠組みは少なからず先天的なものがあるだろう。また、《中心》性の強力な父権や親族への反発だという見方も可能だろう。だが、その反発を、同じ家庭に育った弟の威三郎は持たなかったようである。とするなら、家庭の《中心》性への離反という面のみを強調するわけにはいかない。やはり、荷風に固有の資質がなくては彼の反応はあり得なかった。ただし、そう考えるのはいかにも決定論でありすぎる。

荷風のこの《周縁》への沈潜志向はどこかで芽生え強固になった契機があったと考えるべきであろう。それが、いままで検証してきた横浜正金銀行体験であり、この契機によって、具体的に強化されたと考えするという推論は上でほぼ実証されたと言ってよいのではないか。ただ単に横浜正金銀行体験が自然に彼に及ぼした偶然的資質の強化だけではなく、これをもろもろの反《中心》志向へ利用した荷風の意識的な操作が相当あることも指摘しておかなくてはならない。たとえば、フランスへ行くために、アメリカの文化性欠如批判が父の耳に入るように言いふらす。すなわちウォール街に象徴される《中心》世界からの離脱を意図的に行おうとするうちに、彼の身には《周縁》という模様への親和性が育つのである。その意図がどれほど強固であったかは別として、あきらかに、《周縁》志向は身体化していき、フランスで実際に開花して結実したという図式が可能であろう。こ

うして荷風の“様相”は《周縁》の持つ属性の世界と一体化していくのである。この感覚は“消費”として発生して、いまや“生産”と変容し、のちに「溼東」の風景の表象に《周縁》を重ねて見るようになるのである。「溼東」は地理的位置ではなく、《周縁》の記号となり、荷風に独自の読み取りの可能性を与える。だからこそ、この荷風はいかなる“主義”にもなじまず、従って、冒頭に述べた既存概念にもとづく枠付けの命名になじまないのである。

『あめりか物語』と『ふらんす物語』は、明治時代における外国体験を作品化した著名な作品としてしばしば一括りにして扱われるが、荷風に即して言うなら、この二つの作品の諧調の違いは歴然としている。前者の諸短編のうちのニューヨーク（すなわち銀行員時代）を舞台とした作品に兆した《周縁》の胚種が、後者ではほとんど完璧に開花しているからである。『あめりか物語』と『ふらんす物語』の基調は決定的に異なっているのである。

しかも、さらに重要なのは、『ふらんす物語』で編制され、内面化された《周縁》は、帰国後の荷風の作品世界への連続性をもつだけでなく、ほとんどその基本色調として強化され荷風の生き方そのものとも重なっていくことである。とりわけ、帰国後の諸作品、たとえば『溼東綺譚』や『斷腸亭日乗』を染め上げている文学性と生活感覚の矛盾なき重なり明瞭にみられるところである。これに加えて、荷風の後半生に流れる諦観ともいうべきニヒリズムが、『偏奇館吟草]<sup>122)</sup>の「絶望」や「暗き日のくり言」に見られるようになるが、おそらくこの様相の底流をなすのが、荷風の『ふらんす物語』以降に深化するノスタルジックな風景へのまなざしと重なるのであろう。《周縁》は空間から時間へとシフトするのである。これらの議論は別の機会に譲る。

## 【註釈】

### 凡例

- ・ 荷風からの引用は、出典を作品名のみとし、出典ページを示さない。参看するエディションが多種多様なためである。ただし、日記類は、記述の年月日をつける。
- ・ 荷風の著作は諸版で内容が異なることがある。その引用文言によって論述内容に特段に影響を与えられる場合をのぞいて、とくにどの版であるかを明記しない。たとえば『ふらんす物語』である。「かつての」荷風がそう書いた、「のちの」荷風がそ

う書きなおしたという捕らえ方をしたいからである。いずれも荷風である。

- ・ 既発表の拙稿「註釈『ふらんす物語』」（法政大学多摩論集、2004）や『荷風のリヨン』（白水社、2005）や『永井荷風一仮面と虚像』（至文堂、2009）所収の「荷風の“フランス文学”」などから事実に関する記述の一部を、引用符なしに採録をしている場合がある。たとえば、荷風のリヨン到着の日程や小野支店長の経歴である。自著からの引用に注記を付ける愚を避けるためである。
- ・ 年号に、西暦と元号が混在するのは、出版物の奥付の記述などによる。また、本文では、時代性を見えやすくするために、元号をしばしば用いる。

## 註

- 1) 荷風の2歳年上。明治35年に外交官となり、荷風滞米中は、ニューヨーク帝国総領事館補であった。そのあとワシントンの大使館に移り三等書記官となった。いとこ同士ということもあり、荷風はニューヨーク滞在中、ときに松三のアパートに同居し、至近の職場で頻繁に行き来をした。しかし、帰国後の大正3年ごろにはすでに疎遠な仲となり、松三の死についても後日新聞記事で知る程度の関係となる。
- 2) 『斷腸亭日乗』大正11年12月22日
- 3) 『斷腸亭日乗』昭和18年8月15日
- 4) この血縁者の中には、作家の高見順や詩人の坂本越郎がいる。彼らも荷風については断片的な記述しか残していない。高見順と荷風には接点はいくつかあったが、直接親交があったわけではない。私たちは、互いの日記で知ることになる。たとえば、『斷腸亭日乗』の昭和15年9月13日の条で「文士高見順<sup>しばしば</sup>屢 樂屋に來り余に交際を求めむとすと云ふ。迷惑甚し」と記している。このように荷風には高見が功利的に接近してくるよう見える姿勢を嫌った記述が何回かみられる。一方、高見順は、『続 高見順日記 第二卷』（勁草書房、1975年）の昭和38年2月16日の項（pp.34-35）で、荷風全集発刊にさいし「日記」部分について、岩波社長から相談を受けたとして、「現存者の悪口がひどい（略）。私に関しても、ひどい悪口がある。」その部分について、「言い分」がある、として釈明を書いている。だが、事実関係はともかく、荷風の側には高見を嫌悪する感覚的なものがあったとみたい。ひとつは、高見順は荷風の最も嫌った叔父の鈔之助の私生児であり、この事を知り、嫌悪感を募らせたこと。もう一つは、高見順が日本独特の文壇という村社会でさかんに同業者たちと交わり、出版社、新聞社に人脈をつくり、文芸家協会やペンクラブなどの組織で理事などの役職につく、その体質である。そういう高見順の現状を荷風は生前に知っていたとは思えないが、荷風は、直感的に彼の体質からこの臭いを嗅ぎ取っていたのではないか。一方、高見側からも、

## 荷風の周縁世界編制

ある感情が働いていただろう。主家でぬくぬく育った荷風に、せつかく送った自著を疎んじられ、交際を拒絶されたことへの憎悪や恨みである。ついでに、もうひとりのいとこの坂本越郎の方は、荷風と直接の親交もなく、また生々しい関係もなかったせいで、死後、荷風の文学記念碑建立に際して、かつて遠望した荷風の思いでや荷風論のおだやかな一文を書き記している（「荷風一面」、『荷風忌や』pp.5-64、浄閑寺 昭和44年）。たぶん坂本の方は血縁者のなかでは珍しい例といえるだろう。

- 5) 『墨東綺譚』
- 6) 『墨東綺譚』
- 7) 秋庭太郎『考證永井荷風』、岩波書店、1966年 pp.728-729
- 8) 吉野俊彦『“断腸亭”の経済学』、日本放送出版会、1999年
- 9) 同書、pp.34-38
- 10) 奥野信太郎「荷風と金銭」『荷風全集』第20巻（昭和39年）月報16など枚挙に暇ない。
- 11) 1952（昭和27）年。受賞者：永井荷風（文学）、梅原龍三郎（洋画）、熊谷岱蔵（医学）、辻善之助（歴史学）、朝永振一郎（物理学）、安井會太郎（洋画）、佐々木惣一（憲法学）。
- 12) 『毎日新聞』夕刊。昭和27年10月21日。
- 13) 文化功労者年金は年額50万円。『断腸亭日乗』には毎年の受取額が記録されている。
- 14) 『朝日新聞』昭和27年11月4日。
- 15) シアトル、タコマ、カラマズズウ、シカゴ、セントルイス（万博）、ワシントン、ニューヨーク
- 16) 『西遊日誌抄』1904（明治37）9.25
- 17) 「再會」（『ふらんす物語』）
- 18) 「再會」（『ふらんす物語』）
- 19) 『西遊日誌抄』1905（明治38）7.19
- 20) 1905（明治38）年8月10日から9月5日までポーツマスで交渉が行われた。
- 21) 『西遊日誌抄』1905（明治38）7.20
- 22) 開戦当時、タコマにいた荷風は「號外を手にした時無論非常に感激した」とのちに小品「花火」で記している。しかし、この文意は、後段の、それは日比谷の焼き討ち事件や騒乱を知らなかったからだという部分にある。つまり一面のみである出来事を誤解してしまったことの事例のひとつであり、つまりは、否定の修辞なのだ。
- 23) 明治38年7月26日、井上精一あて書簡
- 24) 『西遊日誌抄』1905（明治38）7.19
- 25) 明治38年7月26日、井上精一あて書簡

- 26) 相馬永胤は彦根藩の藩士。明治4年、藩費留学生として21歳で渡米、コロンビア法律学校（現・コロンビア大学）を卒業。さらにエール大学大学院で経済学を学び、横浜正金銀行に入行、42年間職にあった（頭取などの要職に就く）。
- 27) この建物はSamson Buildingとして世紀末に建てられ、のちThe Merchants Bank Buildingとなり、正金銀行はその店子あるいは同居になっていた。以前はWarren Street 97番地（1885年の*New York Times*記事によると7番地となっている。97のまちがいか）すなわち当時の領事館と同じ建物に同居。また次の移転先がウォール街60番地でやはり領事館と同じ住所である（1896（明治29）年には同銀行支店の住所を“6 Wall St.”という*New York Times*の記事があるが、これは60にまちがいでないか？）。その後63番地に独立した。これが荷風の勤めた支店である。ついでに、このウォール街63番地のビルはその後、1929年に壊されてThe Wall and Hanover Buildingという名のオフィスビルになり、現在はCrestという賃貸マンションに改装されている。
- 28) 『西遊日誌抄』1905（明治38）11.30
- 29) 『西遊日誌抄』1905（明治38）12.2
- 30) 『西遊日誌抄』1905（明治38）12.3
- 31) 『西遊日誌抄』1905（明治38）12.7
- 32) 『西遊日誌抄』1905（明治38）12.8
- 33) 明治39年1月7日、永井恆あて書簡
- 34) 明治39年1月7日、永井恆あて書簡
- 35) 「自伝」（『斷腸亭日乗』「昭和己巳の年四月識」とある。昭和4年（1929年）である。
- 36) 明治39年1月7日、永井恆あて書翰
- 37) 高橋是清（1854-1934）は、1906年3月～1911年6月のあいだ横浜正金銀行頭取兼日本銀行副総裁であり、1911年6月から1913年までは日銀総裁。昭和11年2月26日、2・26事件で暗殺される。
- 38) 『新春懇談會』
- 39) Y. Enomotoというのは正友会所蔵の「横濱正金銀行行員録大正7年6月1日現在」の束にある「紐育出張所行員名簿」に記載されている「榎本榮三」ではないか。
- 40) 明治40年8月8日付け榎本宛書簡
- 41) *Japan in New York*, 1908, Anraku Publishing Co., New York, pp.22-23。以下、荷風のニューヨーク時代の日本人社会の詳細については、偶々荷風の正金銀行ニューヨーク支店時代に編纂され、現在のThe Library of Congress（アメリカ合衆国国立議会図書館）に所蔵されているこの貴重な資料に負うところが多い（掲載写真の内、数葉は同書に負う）。
- 42) *Japan in New York*, 1908, Anraku Publishing Co., New York, pp.39-47

荷風の周縁世界編制

- 43) 「西班牙料理」(『あめりか物語』)
- 44) 荷風が滞在中、領事は内田定槌。1906年からは小池張造総領事。
- 45) 『西遊日誌抄』1905(明治38) 12. 20
- 46) 『西遊日誌抄』1906(明治39) 4. 23
- 47) 『西遊日誌抄』1906(明治39) 6. 20
- 48) 『西遊日誌抄』1906(明治39) 7. 9
- 49) 『西遊日誌抄』1906(明治39) 9. 15
- 50) 『西遊日誌抄』1906(明治39) 9. 24
- 51) 『西遊日誌抄』1906(明治39) 9. 26
- 52) 『西遊日誌抄』1906(明治39) 9. 27
- 53) *Japan in New York*, 1908, Anraku Publishing Co., New York, p.27
- 54) 明治39年1月7日、永井恆あて書翰
- 55) 加太宏邦「荷風の“フランス文学”」、『永井荷風』至文堂(ぎょうせい)、2009
- 56) 『西遊日誌抄』1906(明治39). 3. 28
- 57) 「暁」(『あめりか物語』)
- 58) 『西遊日誌抄』1905(明治38) 12.25
- 59) 『西遊日誌抄』1906(明治39) 1. 1
- 60) 『西遊日誌抄』1906(明治39) 1. 7
- 61) 『西遊日誌抄』1906(明治39) 2. 2
- 62) 『西遊日誌抄』1906(明治39) 6. 28
- 63) 「再會」(『ふらんす物語』)
- 64) 「再會」(『ふらんす物語』)
- 65) 「再會」(『ふらんす物語』)
- 66) 「夏の海」(『あめりか物語』)
- 67) 「夏の海」(『あめりか物語』)
- 68) 『西遊日誌抄』1906(明治38) 1. 7
- 69) 『西遊日誌抄』1905(明治38) 7. 8
- 70) 『西遊日誌抄』1906(明治39) 1. 20
- 71) 『西遊日誌抄』1906(明治39) 4. 2
- 72) 『西遊日誌抄』1906(明治39) 4. 23
- 73) 『西遊日誌抄』1906(明治39) 6. 27
- 74) 『西遊日誌抄』1906(明治39) 7. 19
- 75) 『西遊日誌抄』1906(明治39) 10. 16

- 76) 『西遊日誌抄』 1907 (明治40) 1. 8
- 77) 『西遊日誌抄』 1906 (明治39) 8. 1
- 78) *Japan in New York*, 1908, Anraku Publishing Co., New York, p.39
- 79) 「晩餐」(『ふらんす物語』)
- 80) 明治40年12月11日、西村恵次郎宛書簡
- 81) 「序」(『ふらんす物語』)
- 82) 「蛇つかひ」(『ふらんす物語』)
- 83) 『西遊日誌抄』 1908 (明治41) 1. 29
- 84) 『西遊日誌抄』 1908 (明治41) 2. 1
- 85) 『西遊日誌抄』 1908 (明治41) 2. 3
- 86) 『西遊日誌抄』 1908 (明治41) 2. 23
- 87) 瀧澤敬一『第五フランス通信』昭和21年、岩波書店、p.88
- 88) 「花火」は大正8年7月1日腹案、10月22日脱稿の作品だが、描かれるのは「明治四十四年慶應義塾に通勤する頃」の感懐である。
- 89) 加太宏邦「荷風の“フランス文学”」、『永井荷風』至文堂(ぎょうせい)、2009年
- 90) 「蛇つかひ」(『ふらんす物語』)
- 91) 「蛇つかひ」(『ふらんす物語』)
- 92) 「蛇つかひ」(『ふらんす物語』)
- 93) 「蛇つかひ」(『ふらんす物語』)
- 94) 「蛇つかひ」(『ふらんす物語』)
- 95) 「蛇つかひ」(『ふらんす物語』)
- 96) 「蛇つかひ」(『ふらんす物語』)
- 97) 「蛇つかひ」(『ふらんす物語』)
- 98) 「蛇つかひ」(『ふらんす物語』)
- 99) 「霧の夜」(『ふらんす物語』)
- 100) 『西遊日誌抄』 1908 (明治41) 1. 18
- 101) 「秋のちまた」(『ふらんす物語』)
- 102) 「秋のちまた」(『ふらんす物語』)
- 103) 「秋のちまた」(『ふらんす物語』)
- 104) 「霧の夜」(『ふらんす物語』)
- 105) 「霧の夜」(『ふらんす物語』)
- 106) 「霧の夜」(『ふらんす物語』)
- 107) 『西遊日誌抄』 1908 (明治41) 3. 13

## 荷風の周縁世界編制

- 108) 加太宏邦『荷風のリヨン』白水社、2005年
- 109) 夏目漱石「霧」（『永日小品』）
- 110) 「霧の夜」（『ふらんす物語』）
- 111) 「ロンドン留学日記」1901（明治34）1.4
- 112) 「霧の夜」（『ふらんす物語』）
- 113) 「霧の夜」（『ふらんす物語』）
- 114) 「蛇つかひ」（『ふらんす物語』）
- 115) *Indicateur Lyonnais* 1908年版による。
- 116) 「内務省告示第三十六號」
- 117) 「フランス（ママ）物語の發賣禁止」というエッセーでは「(出版社から電話連絡を受けて)私は“さうか”と答へただけで別に驚きもしませんでした。(中略)相手は政府と云ふ強いもの、こちらは弱い詩人にすぎない」と『讀賣新聞』（明治42年4月11日）で感懐を述べている。
- 118) 荷風は「近松によればそれ[恋]は身の破滅、死の導きであり」とこの作品とほぼ同時期の『歡樂』で述べている。
- 119) 明治40年7月9日付け西村恵次郎宛書簡
- 120) 戦後、昭和27年12月に『中央公論』に掲載されるまで表にでることはなかった。
- 121) 「女中の話」
- 122) 『斷腸亭日乗』昭和15年12月16日の条に「新體詩偏奇館吟草を編む」と記されている。